

お知らせ

各地で緊急支援を行っています

ここ数年、紛争や自然災害が各地で頻発し、多くの子どもたちが厳しい環境に置かれています。チャイルド・ファンド・ジャパンは、世界のチャイルド・ファンドと連携し、子どもたちの命と未来を守るため、各地で緊急支援を続けています。ここでは、3つの地域の活動をお伝えします。

〈ウクライナ〉

2022年2月に始まった人道危機からついに4年が経過しました。現在もなお、膨大な数の人々が支援を必要としており、中には物心ついた時から戦争のある日常しか知らない子どもたちも大勢含まれています。

現在、支援活動で力を入れているのが、カウンセリングやアートセラピーを通じた「心のケア」です。爆撃の恐怖や避難生活、家族との別れを経験し、声すら出せないほどの恐怖の中にいた子どもたちが、絵を描くことなどを通じて少しずつ感情を言葉にできるよう、専門的なサポートを行っています。



credit:Arianna Arcana / WeWorld

〈スリランカ〉

2025年11月に発生した大型サイクロン「ディトワ」は、ヌワラエリヤ県やプッタラム県などの広範囲に深刻な洪水被害をもたらしました。チャイルド・ファンドは、洪水で学用品を失ってしまった子どもたちへの学用品の配布などを行うとともに、泥水に浸かり授業ができなくなった学校の清掃や修繕を、地域の保護者や若者グループと協力して行いました。この作業に参加した住民へ現金や食料を提供することで、被災した家庭の生活再建も同時にサポート。また、洪水後の不衛生な環境で広がるデング熱などの感染症を防ぐため、蚊帳や洗剤を含む衛生キットを配布しています。



災害発生直後は、安全な水の配布も行いました

〈中東(レバノン)〉

2026年2月末からのイラン情勢に端を発し、中東各地で緊張が増す中、レバノンでは、激しい空爆や武力衝突により、わずか数週間で避難民が85万人を超えました。チャイルド・ファンドは、避難をする子どもたちや家族へ、食料や水、石けんなどの衛生用品を届けています。特に、おむつなどの乳幼児用キットや生理用品、高齢者・障がい者向けのケアキットなど、一人ひとりのニーズに合わせた物資の配布を優先。混乱の中でも人としての尊厳を失わずに過ごせるよう、9,000人以上を対象とした支援活動を現在も着実に進めています。



避難生活を行う子どもたちや家族の様子

緊急下において、子どもたちは常に最も弱い立場に置かれます。学校に通い、遊び、安心して眠るという、かつては当たり前だった日常を一つずつ取り戻していくこと。そのために、チャイルド・ファンドは引き続き活動を続けてまいります。

Ch^{id}Fund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

Ch^{id}Fund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う10団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

チャイルド・ファンド・ジャパンだより SMILES

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／高橋潤 事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: inquiry@childfund.or.jp
URL: https://www.childfund.or.jp/

2026年5月発行
(デザイン)
モスデザイン研究所

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2026年5月NO.60

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



特集 紛争を生き抜いたスタッフが語る

フィリピン・南ラナオ州の人々と
子どもたちの希望の道

Ch^{id}Fund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集 紛争を生き抜いたスタッフが語る

フィリピン・南ラナオ州の人々と 子どもたちの希望の道



チャイルド・ファンド・
ジャパン
フィリピン事務所
ジャミナ

2025年、チャイルド・ファンド・ジャパンは、フィリピン南部・南ラナオ州でスポンサーシップ・プログラムの支援をスタートしました。ここは、2017年に「マラウィの戦い」と呼ばれる激しい市街戦が起きた場所です。今回の特集では、その紛争を自ら経験し、現在フィリピン事務所のスタッフとして現地で支援に携わるジャミナが、現地の人々の歩みと、子どもたちへの支援についてお伝えします。



2017年「マラウィの戦い」の残響

フィリピンで2番目に大きな湖を有し、豊かな文化を育んできた南部ミンダナオの南ラナオ州。2017年5月、その静かな平穏は突如として打ち砕かれました。この地域に拠点を構える過激派組織に対し、政府軍が軍事作戦を開始したのです。「マラウィの戦い」として知られるこの紛争は、当初短期的な軍事作戦として展開されましたが、実に5カ月間に及ぶ市街戦へと発展したのです。

ここに生きる人々にとって、この紛争は「教科書に書かれた過去の歴史」ではありません。人生を「それ以前」と「それ以後」に分断した「グラウンド・ゼロ」なのです。マラナオ*の文化と商業の中心地であった場所は、文字通り平らにならされてしまいました。30万人以上が一瞬で住む場所を追われ、密集した避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされました。10年弱が経過した今なお、銃弾の跡が残るコンクリート、崩壊したモスク、草に覆われた廃墟が立ち並ぶ様子は、あの154日間の闇を静かに、痛ましく物語っています。目に見える瓦礫の撤去は進んでいますが、人々の記憶に刻

*南ラナオ州・北ラナオ州に暮らすイスラム教徒の先住民族

まれた心の傷は今も消えることはありません。

中心部の廃墟は、154日間にわたる紛争の静かな記念碑となっている



いま私が人道支援のスタッフとして働いているのは、私の個人的な経験が深く関係しています。私自身が、この紛争の生存者なのです。

2017年5月、私と家族は14日間にわたり、自宅に閉じ込められました。重砲の轟音、空爆による風切り音が、私たちを恐怖で支配する「現実」でした。限られた食料を分け合い、逃げ出せる道が開けるのを祈るばかりでした。

ある日、市民の避難を目的に、わずか「15分間」の停戦が発表されました。私たちは何も持たず、ただ生き延びるために命だけを抱えて逃げました。瓦礫まみれの通りで母の車いすを必死に押したときの身体の重さ、1m進むたびに速くなる

胸の鼓動は今も忘れられません。そこには、押し潰された車、地平線を覆う煙、そして声を発することのない生き延びることのできなかった人々という、凄惨な光景が広がっていました。

その後の光景はさらに悲惨でした。私たちのあとを歩いていた人々が砲撃に巻き込まれたのです。15分の停戦が終了したからです。ほんの僅かな時間の差が、生と死を分けました。絶望的な無力感と、重く覆いかぶさる不安を、私は今も抱えています。

私は、人道支援の仕事を通じて、紛争が残した長期的な傷を数多く目にしてきました。引き裂かれた家族、混乱の中で置き去りにされた子どもたち、そして紛争の被害者であるにも関わらず、拘束されテロリストと誤って非難された少年たち。彼らの存在が、私を人道支援の道へと突き動かしています。



2017年6月、立ち入りを許可された最初の人道支援関係者の一人として、自身の家の残骸の中に立つジャミナ

見えにくい危機 紛争後の子どもたちに残る心の傷

コンクリートで再建できるインフラとは異なり、人々の「心のインフラ」ははるかに脆いものです。この地域の子どもたちは、この紛争の「沈黙の目撃者」です。私たちの支援する子どもたちの多くが、人生で最も大切な子ども時代を、避難所や「テントシティ」と呼ばれる場所で過ごしました。そこにはプライバシーがなく、生活必需品を

入手することさえ困難な日々でした。

今も大きな音に敏感な子どもたちや、仮設住宅から抜け出す未来を想像できない子どもたちがいます。紛争は子どもたちから、住む家だけではなく、自分の力で何かできるという自信や未来を選ぶ力をも奪ってしまいました。私たちが取り組む課題は、すべての子どもがもつべき「安心感」と「夢を見る権利」を取り戻すことなのです。

恒久住宅を待ちながら、今なお多くの家族が仮設住宅で暮らしている



子どもたちの心を支える チャイルド・ファンド・ジャパンの支援

チャイルド・ファンド・ジャパンの南ラナオ州での支援は、スポンサーシップ・プログラムを基盤としています。日本の支援者と子どもが一对でつながり、心の支えを含めた、包括的な支援を届けています。生活再建に苦しむ多くの家庭にとって、制服や教材、通学交通費は大きな負担であり、子どもが中退を引き起こす大きな障壁です。スポンサーシップ・プログラムではこれらの必需品を支援し、教育が優先されるようにしています。

また、私たちは「子どもの権利」を重要視し、子どもはもとより、保護者に対しても子どもの権利を学ぶセッションを行い、子どもが守られる地域づくりをサポートしています。

手紙のやり取りは、私たちの活動の素晴らしい側面の一つです。子どもたちが日本の支援者から手紙を受け取ると、自分は忘れられていないこと、そして世界の一員であることを実感します。それは、紛争後の限られた世界から、可能性に満ちた広い世界へ視野を開くことなのです。

2024年には、スポンサーシップ・プログラム開始に先駆けて、「みんなで守る 子どもの権利プロジェクト」を通して、幼児教育施設を建設しました。2つの教室を備えた学びの場を建設し、80人の子どもたちに安全な学習空間を提供しました。特に私が誇りに思っているのは、「マラナオの精神」がこのプロジェクトに息づいたことです。地域の人々が私たちと共に建設に携わり、通路用の土地を提供してフェンスや花壇で施設周辺を整備してくれました。地方自治体は光熱費を負担し、プロジェクト終了後も学校の持続的運営を支えてくれています。



上:支援で新設された幼児教育施設
下:新設された建物の中でポーズを取る子どもたちとスタッフ



子どもたちが 平和な未来を描くために

2025年には、遺贈寄付のご支援を通して、地域の高校生600人への学用品の配布、仮設住宅で暮らす500世帯への衛生用品の提供も行いました。また、教師30人と保護者30人を対象に、子どもの権利と平和教育に関する専門研修も実施しました。イスラム的視点を取り入れることで、

子どもの保護の理念が地域の文化と宗教的価値観に根差すよう配慮しました。

次世代の力を育むため、「私の家、私の居場所、私の未来」をテーマにしたポスター・コンテストも開催しました。150人以上の高校生が、紛争の街ではなく、希望ある未来像を描き出しました。

日本の支援者の皆さまへ

日本の皆さまのご支援は、この地域が「悲劇」ではなく、そこから立ち上がる「力強さ」をもっていただくと、私たちが証明するための力になっています。完全な復興への道のりは依然として険しく、課題は山積しています。しかし皆さまとのパートナーシップがあれば、子どもたちが新たな平和の時代を築き上げていくでしょう。

支援を受ける子どもたちを見ていると、私はかつての自分自身を見ているように感じます。彼らが知ってしまった恐怖を、私も知っています。しかしそれ以上に、すべてを失ったと感じたときに差し伸べられる手の価値を、私は誰よりも理解しています。私が生き延びることができたのは、まさに贈り物でした。だから私は、この地域の子どもたちが決して一人で困難に向き合うことのないよう、生涯を捧げたいと思っています。この地は今、一つひとつのレンガと、一人ひとりの心によって、確かに、立ち上がりつつあります。



仮設避難所で、フィリピン事務所長が衛生キットの配布を指揮する様子

ジャミナが語るように、日本の皆さまの支援は物質的なサポートだけではなく、支えてくださる皆さまの存在自体が子どもたちの心の支えにもなっています。チャイルド・ファンド・ジャパンでは、南ラナオ州の子どもたち、また、フィリピンの各地域、ネパール、スリランカの子どもたちを、心の面からも支えてくださるスポンサーを募集しています。ぜひ皆さまのお力をお貸しください。

スポンサーシップ・プログラムの詳細はこちら



フィリピン・北ダバオ州の 山岳地帯に、母子出産施設が 完成しました！



チャイルド・ファンド・ジャパンは、日本NGO連携無償資金協力の支援を受け、フィリピン南部・北ダバオ州において、2025年3月から保健医療へのアクセス改善事業を実施してきました。2026年3月、無事にプロジェクトが完了しました。

プロジェクトの対象地域は、山々が連なる緑豊かな地域で、古くからこの土地で暮らす少数民族の人々が生活しています。美しい景色の一方で、病院や保健センターが近隣にはなく、急な病気やケガの際には、未舗装の険しい山道を徒歩やバイクで何時間もかけて病人を運ばなければなりません。特に、出産に臨むお母さん、そして生まれてくる赤ちゃんが、運搬中に命を落とすことも少なくありません。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、この地域の人々が安心して医療を受けられる体制を整えるため、外務省からの資金援助を受け、地域の中に「母子出産施設：Maternal and Child Birthing Home」を建設しました。診察室や治療室に加えて分娩室も設置し、清潔で安全な環境で安心して出産できる環境を整えました。さらに緊急時に患者や妊産婦をより大きな病院へ運ぶための妊婦用の緊急車両も配備しました。



分娩室の様子

2026年3月10日には、施設の竣工式を開催し、約9,000人の住民たちの命を支える拠点として、

スタートを切りました。竣工式では、在ダバオ日本国総領事館の小野総領事から「この施設建設が日本とフィリピンの皆さんを結ぶ友好の場所となって欲しい」といったスピーチがありました。

プロジェクトでは、建物を造るだけでなく、「人」の育成にも力を入れていきます。現地の医療系大学と提携



ユースへの研修の様子

し、行政職員や地域の保健ワーカー、少数民族のリーダーを対象に、施設運営の研修を実施しました。さらに、母親や高校生、地域のユースを対象に、栄養、衛生、薬草、母子の健康、情報の安全管理等についての知識を伝える保健教育も行ってきました。参加者からは、「参加前は多忙中の受講に戸惑いもありましたが、参加してみたら、とてもためになる貴重な講習ばかりで、忙しいスケジュールを調整して、全講義受講しました。ここで学んだことを、家族や友達にも教えてあげたいです」といった声があり、地域に健康の意識が根付きつつあることが見えました。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、2026年度も引き続き、外務省日本NGO連携無償資金協力の支援を受け、フィリピンの子どもたちの環境改善を行っていく予定です。ハードとソフトの両面から、地域の人々とともに、子どもを守る環境をつくっていきます。

現地プロジェクト・マネジャーの声



プロジェクト・マネジャー：
外山

道路の舗装もされていない深い山奥に医療施設を建設することは決して容易なことではありませんでした。本施設の完成にあたり、温かいご支援をくださった日本の皆様、そして様々な困難を乗り越えて尽力くださった提携団体のダバオ医科大学の皆様、そして何よりも、この場所を誰よりも待ち望み、建設を支えてくださった現地の少数民族の皆様に心より感謝申し上げます。

施設完成後は、資格を持つ医療従事者が本施設に駐在し、出産前後の母子だけでなく、地域の皆様のニーズに根付いた青少年やファミリーのための様々な保健教育や啓もう活動を行っていく予定です。

支援を通して 良い方向に変わったことを 教えてください!



コミュニケーション・マーケティング部:
館野

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、ネパールにおいて学習環境の整備として、学用品の支給、教室の整備、教師への研修を通じた授業の質改善などの支援を行っています。この度、職員がネパールの支援地域を訪問した際、確認できた支援の成果と、そこで聞いた課題をレポートいたします。

基本的な教育支援の重要性を改めて実感

子どもたちに支援を受けて嬉しかったことを聞くと、「学用品をもらったこと!」と口をそろえて答えてくれました。



支援のおかげで、「もう友達から学用品を借りずにすむ」と笑顔で話すラム君

貧困で学用品を揃えることができない家庭は多く、親戚を頼ったり、日雇いで働きに出たり…と、支援を受ける前は各家庭でなんとか

していたようです。なかには友達に借りたという男の子もいました。毎日使う鉛筆やノートを友達に借り続けるのは、気後れすることだったのでしょう。「とても惨めだったよ」とその時の心情を教えてくださいました。

学用品の支給は単なる家計を支える支援ではありません。子どもたちにとっては、勉強のモチベーションにもなっています。実際に保護者からは「子どもがより意欲的に勉強するようになった」「成績が良くなった」などの声がありました。子どもには学校を卒業してほしいと願う親が多い中、こういった子どもの変化は嬉しいものだと思います。「先生になりたい」「技術職に就きたい」「日本で働きたい」。子どもたちが抱く夢は様々ですが、たくさん勉強して夢を叶えてほしいと思います。

大人も子どもも意見がしっかり言えるように!

ネパールには「子どもクラブ」と呼ばれる、日本でいえば生徒会のような組織があり、チャイルド・ファンド・ジャパンはそのサポートもしています。とある学校で子どもクラブを見学した際、司会の男の子が、地域住民への教育の啓発や劇、スピーチ大会などを行ったことを私に説明し、活動を通して培ったこととして「人前で自信をもって話せるようになった」ことをあげました。司会の男の子をはじめ、子どもクラブのメンバーは、しっかりと自分の意見を言える子がほとんどです。彼らの年頃の私は、とても恥ずかしがり屋で、人前で話すなんて機会があれば一週間前から憂鬱に思うほど。ましてや、遠い国からやってきた人の前で話すなんて私だったら不可能なことを彼らはやり遂げて見せたのです。

また、ある元支援チャイルドのお母さんは、別の集落から嫁いできたことなどから、近隣住民の目を気にして

過ごしていました。だんだんと、「自分は価値のない人間なのだ」と思い込むように。しかし、男女平等や自尊心に関する研修を受けたことで、自信を取り戻し、「今では意見できるようになったのよ」と微笑みながら言います。

人前で話すことは、子どもたちが大人になって仕事をするときも、上述のお母さんのように、地域社会で暮らす際にも必要なスキルです。自分の意見をしっかりと話すことは、子どもたちの未来を支えてくれることでしょう。



子どもクラブで発表する男の子

どうやって使うのかを学び、実践していく

学習環境の整備として、トイレや水道の建設支援、教室の机や棚、クッションなどの支援を受けた学校も見学しました。どの教室の子どもたちも、生き生きとした顔で机に向かっています。その学校の校長先生からは、「信じられないかもしれないけど、その辺で用を足してしまう子どもがいました。支援を通して、子どもたちはトイレの使い方や手の洗い方とその大切さを学び、日々行

うようになりました」と、支援を通して起きた子どもたちの良い変化を教えてくださいました。

校長先生から学校設備の案内を受けたときの様子



「毎日学校に通うこと」のハードルが高い

校長先生に困りごととは無いかと聞いてみると「すべての子どもたちが学校に毎日通えているわけではないこと」をあげました。なかでも、中学生くらいになると、労働や結婚で学校をやめてしまう子どもが出てきます。「“自分もそういう経験をしたから子どももそうすべき”という親がいるのです」と校長先生。保護者へ教育の重

要性を周知することの必要性が伺えました。

「毎日学校に通うこと」は、訪問の間、何度も聞いた言葉でした。雨季は道がぬかるみ登校が大変になるから、学用品を買うために日雇いの仕事に行くから、足を怪我してしまったから。子どもたちが毎日学校に通えない理由は様々です。日本では当たり前の「毎日学校に通うこと」のハードルの高さに、支援の重要性和現地の課題を感じました。

終わりに…

今回ご紹介した支援の成果は、小さいものかもしれませんが、この成果の積み重ねが、子どもたちにとっては大きな力となります。皆さま、引き続き、お支えくださいますよう、お願い申し上げます。

<支援地域のひとコマ>

ネパール事務所のスタッフたち

支援活動を共に支える頼もしい仲間です!



大盛ごはんを10分で完食!

現地スタッフはみんな食べるのがとにかく早かったです



雲の中からナマステ!

山深い支援地域では通学路にも雲海が出現します。



でこぼこ道に揺れる車内

数時間かけて通学する子どもたちも。雨季は歩くのがより大変に

